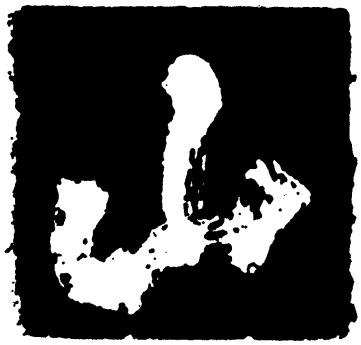
第776号 平成22年 1 月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可



2010年（平成22年）
1月号（No. 776）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

目　次

日本のヒマラヤ登山、新しい潮流‥ 1
日本山岳会の再生と復権をめざして‥ 4
『ヒマラヤ登山記録集成』（全二巻）が
　秩父宮記念山岳賞を受賞‥‥‥‥ 6
登山界はいま――④JACの課題と展望‥ 7
テント作りの名匠 吉田喜義さんの功績‥ 8
東西南北‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 9
　直江兼続と朝日軍道
活動報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 10
　総務委員会／集会委員会／
　アルパインフォトビデオクラブ
支部だより‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 12
　北海道支部／秋田支部／宮崎支部
図書交換会出品目録
　および購入申し込みのご案内‥‥ 14
会務報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 16
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
INFORMATION‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 18
山の博物館訪問‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 19
　谷川岳山岳資料館
図書受入報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 ‥‥‥‥‥‥ 10〜20時
水・金 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 13〜20時
第2、第4土曜日 ‥‥‥‥‥ 閉室
第1、第3、第5土曜日 ‥‥ 10〜18時

日本のヒマラヤ登山、新しい潮流

山森欣一

最近、少数ではあるが、若い登山家たちによるヒマラヤでの登山活動には目を見張るものがある。2010年の年頭にあたり、ヒマラヤ登山に造詣の深い山森欣一さんに、これまでの歴史を振り返りながら今後のヒマラヤ登山を展望してもらった。

ピオレドール受賞

2009年は日本ヒマラヤ登山界にとって画期的な年となった。前年、インド・ヒマラヤ2つの初登攀（カメット南東壁初登攀＝平出和也・谷口けいペア、カランカ北壁初登攀＝一村文隆・天野和明・佐藤裕介）に対してダグ・スコット審査委員長によるピオレドール（黄金のアイスアックス）賞が授与された。さらにカランカ隊トリオがカラコルムのスパンティークのゴールデンピラー第3登に成功し、韓国のピオレドール・アジアにノミネートされたのである。

21世紀に入り、日本のヒマラヤ登山界は明らかに変わった。竹内洋岳が8000メートル峰14座登頂をシンプル登山によって完成させようとしている。馬目弘仁、横山勝丘、花谷泰広、カランカトリオらに代表される若手による困難な岩壁・氷雪壁登攀、カメットペアのアルパインスタイルによる高峰登山。そして高度は低いもののJAC学生部、同志社大学らの学生だけによる6000メートル峰初登頂など。これらの登山は明らかに1990年代までのヘビーウエイト登山とは異なるライトウエイト登山への移行である。

私は2009年のもうひとつの象徴的な事柄として、ヒマラヤで1968年から41年間続いていた「標高6000メートル以上の高峰」での「連続死亡遭難事故」のストップをあげたい（個人情報保護法の施行により、隠されている死亡事故を除く）。これは、最近の「高所遠足」の増加によって死亡事故が零となったのではなく、前述のような困難な登山が実践されていながら達成されたものである。登攀の裏面としてある死亡遭難をストップさせることは、いわば登山界の隠された悲願でもあった。

ヘビーウエイトからライトウエイト登山への変遷

私は日本のヒマラヤ登山の時代を大きく4つに分類している。

一・初登頂時代「未知」
二・初登攀時代「困難」アルピニズム
三・ハンディキャップ「シンプル」
四・二極分化「多数派・高所遠足」と「超少数・尖鋭」である（会報『山』2000年12月（667）号参照）。

今日の現象は、三と四のなかの「シンプル登山の実践＝超少数・尖鋭」の具現化であると思う。一から二を経て三に至るまでにさま

ざまな経過があった。それは端的にまとめればヘビーウエイト登山からライトウエイト登山への移行の苦しみでもあったといえる。

日本のヒマラヤ登山は、マナスル初登頂以後定着した「シェルパ雇用・固定ロープ使用・酸素補給＝長期間登山」方法によって一、二を実践し、ヘビーウエイト登山から抜け出られずにいた（詳細は『山岳』第百四号参照）。

それはまた、未知と困難に挑戦する「アルピニズム」の解釈の相違かも知れない。

それを変えたのは、経済的成長に支えられた意識の変革であった。ライトウエイトによるシンプル登山への渇望に応えたのが原真の「登山のルネサンス＝アルパインスタイル」であり、小西政継の8500㍍峰以上における「無酸素登山」であった。

その代表的な成果は前者では禿博信によるダウラギリⅠ峰単独、山田昇・斎藤安平ペアによる冬季マナスルであり、共にアルパインスタイルによるものであった。後者ではヘビーウエイトながらも山学同志会のカンチェンジュンガ北壁、マカルー、エベレスト無酸素、日山協のチョゴリ北稜無酸素、イエティ同人のエベレスト無酸素などであった。さらにより困難な冬季8000㍍峰への挑戦では、イエティ同人・加藤保男、カモシカ同人・山田昇らによるエベレスト登頂、群馬岳連によるアンナプルナⅠ峰南壁初登攀が成された。

新しいクライマー出現の背景

1980年代のヒマラヤ登山は、山学同志会、イエティ同人、カモシカ同人、群馬岳連、高山研究所、HAJ、JACなどの群雄が割拠し、人材はまさに百花繚乱の状況であり、その集団のエースたちによってシンプル登山を交えたさまざまな記録が達成された。しかし、この時代はまさにアルピニズムの主流を走る英雄たちのあまりにも激しい消耗戦の時代でもあった。ある者は山に逝き、ある者は山から去った。ちなみにこの10年間の7000㍍峰以上の死亡率は2.8パーセントで、どの時代よりも高率である。

1990年代に入ると、山野井泰史によるチョー・オユー単独初登攀とK2単独無酸素、戸高雅史ら3人のブロード・ピーク三山縦走と戸高によるK2単独無酸素、長尾妙子のマカルー無酸素、長尾妙子・遠藤由加女性ペアのアルパインスタイルによるチョー・オユーなどは登山界に衝撃を与えたし、冬季登攀に執念を燃やす群馬岳連によってエベレスト南西壁初登攀も成された。

スパンティーク、ゴールデンピラーの核心部を登る「カランカ隊」トリオ

一方では、7000㍍峰のウルタルⅡ峰をアルパインスタイルで初登頂した、山崎彰人・松岡清司ペアの帰路の遭難は、アルパインスタイルの悪天候での欠陥を改めて認識させられた。岩崎洋ら3人のアルパインスタイルによるナムナニ縦走は、ルート選択による登攀の可能性の新しい局面を示唆したが、いずれにしても登山界にアルパインスタイルが少しずつ取り入れられた時代でもあったのである。

また、1985年のプラザ合意による円高は、日本人のヒマラヤ登山を後押しし、一年に何度も登山する者も現われ、アルパインスタイルを試みる下地ともなっていた。

このように若手登山家が活躍を始める遠因として、幾つも考えられるが、私はあえてそのなかの4つをあげたい。

一・1976年ソ連で開催された国際岩登り競技会参加をきっかけに、登攀スタイルの違いに目覚め、以後フリー化～国際交流～海外雑誌の刺激など、次々と意識改革が進んだ。

二・1980年代から2000年代にかけて、明治大学、信州大学、東京農業大学などが、多くのヒマラヤ登山隊を派遣することで若手が育成されたこと。

三・JACが1990年から開始した「海外登山基金」も大きな意味を持つ。若手の登攀者にとって金銭的な問題は重要なウエイトを占めているからだ。その点を横山勝丘は率直に述べ、「身の丈に合った登山」を勧めている（詳細は『山岳』第百二号参照）。

遅れて日山協も2008年から

「海外登山奨励金」として登山隊に対する支援を開始したが、こちらは支援対象を若手に絞り、目標がより尖鋭的な隊に支援し始めた。四・２００７年2月の「日山協・海登研」懇親会は、異様な雰囲気であった。いつもの年なら老登山家談笑の場であるそこに、７～８名の若者たちがゲストスピーカーのスティーブ・ハウス（アメリカ）を囲んで、リラックスした面持ちで通訳なしで懇談しているのであった。それは、日山協海外登山委員会が、１９９７年から毎年連続して一流のヒマラヤニストであるクルティカ（ポーランド）、トロワイエ（スイス）、シュトレムフェリ（スロベニア）、ディームベルガー（オーストリア）、スコット（イギリス）、オジンツォフとシャバリン（ロシア）、プレゼリ（スロベニア）らをゲストスピーカーとして招いた地道な努力の成果であると、評価したい。

昨年、ＪＡＣ学生部として挑んだ未踏のパンポチェ

今後の可能性

山野井泰史ら少数のメンバーによってかろうじて保たれていたアルパインクライミングは「超少数」であったが、ピオレドール賞受賞者ら同世代のクライマーたちの出現によって「尖鋭派」が築かれ、彼らが奔流となって主流派登山の時代を築けるだろうか。

まず６０００㍍ラインで実践した登攀は、岩壁、ミックス壁など傾斜の強いことが前提にあった。それは７０００㍍、７５００㍍、８０００㍍ラインと進む。そして縦走、冬季もまた視野に入ってくるだろう。それを実現するためには、アルパインクライミングの裾野を長く広くしなければ継続は困難だろう。実践者の遭難という現実を見すえれば、裾野が短く狭ければアルパインクライミングの寿命が尽きるのも早い。

たとえば最近話題の馬目弘仁らによる明神岳を舞台にした「ウインタークライマーズミーティング」は、時機を得たものであり、登攀を実践している関係者の炯眼と実行力に敬意を表したい。裾野拡大の絶好の場となるだろう。

一方、「安全登山」と「エコロジー」をテーマにした「涸沢フェスティバル」は、若者の「麓派」を増やす効果はあっても、アルパインクライミングの芽を育む直接のきっかけとはならないだろう。

おわりに

現在の若手アルパインクライミングの担い手たちが、妻帯し子どものいる家庭をもっているケースが多いことを知り、頼もしく感じる。そのメンバーたちには、ぜひ「登山の楽しさ」を地域社会、せめて自分の出身地でＰＲする担い手となってもらいたいものである。日本社会のなかで登山界の評価は低い。それはこれまで主に「登山は遊び」ということを実しやかに流布する人々に代表されるように、自分の「その日暮らしの楽しみ」に甘んじてきた、有名・無名も含めた登山界の甘さの結果であった。

今はそれを反省し登山界をあげて「登山の楽しみと素晴らしさ」を地元（社会）へ啓蒙することを積極的に行なう必要がある。他人には任せない。テイクイン、テイクアウトのなかで、持ち込んだ物を回収する期間を計画のなかに予め入れるのと同様に、登攀のなかに地元（社会）への啓蒙行為を組み込んでおくことである。

「山は高きが故に貴い」と口走ると、すぐにもアチコチから石礫が飛んでくる。それでも言いたい。ヒマラヤではそれが真実であると。若手の登攀者は金銭的な制約が先に立つのはこれからも変わらない。身の丈登山の可能なアラスカの５０００㍍～６０００㍍ラインで登攀倫理に忠実な登山を実践し、そこで得た経験を、ヒマラヤにしかない７０００㍍～７５００㍍～８０００㍍と少しずつ上げて実践してもらいたいものだ。

挑戦対象の山岳もラインもその困難も、実践者である若者たちは知っている。コンペ感覚ではなく、「道（タオ）」を基本としながらも、山田昇や山野井泰史のように「人当たりがよく、誰とでも仲よく、友人が多い」ことも、また必要なことである。

マニフェスト

日本山岳会の再生と復権をめざして

会長　尾上　昇

会員の皆さま、新年明けましておめでとうございます。新しい年が、皆さまにより良き年でありますことを衷心より祈念し、あわせまして、本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

年頭にあたり、私の日ごろの思いを少し述べさせていただきます。私は、昨年5月の総会で、宮下前会長の後を継ぎ新しい会長に就任させていただきました。その折、所信の一端を会報の『山』に記させていただきました。

山積する山岳会の課題

その内容を要約しますと、現在の日本山岳会には、早急に解決を迫られている課題が山積しています。大きくは、2点に絞られます。まずは、会員の高齢化と若年層会員の減少です。このまま放置しますと、会勢は衰え、いつかは、会の消滅に向かいかねない存亡の危機にあるとの認識です。

このことは、今に始まったものではなく、歴代会長が就任の所信のなかで必ず触れられていまして、古くて新しい課題なのです。しかし、一向にその解決に向けて手が打たれることなく今日に至っています。それだけ事の難しさを表わしているとも申せましょう。

日本山岳会は、もう一つ厄介な問題を抱えています。それは、一昨年の12月、新しい公益法人法が施行され、社団法人である日本山岳会も、好むと好まざるにかかわらずこの新法に則した公益法人に移行しなければならないのです。

この二つの大きな問題から派生して、さまざまな新たな問題点が浮かび上がってきています。それらをランダムに記しますと、会員数の減少傾向の拡大、財務状況の悪化、会員身分の不透明性、ルームの存在の根本見直し、ルームの事務管理体制の強化、ルームの利用状況の限界、各委員会や同好会の再検討、定款や諸規定の見直しなどなど、重要課題の列挙にいとまがありません。

また、これらの課題とは別に、新しい事業計画として「山の日」の制定をあげました。これは、昨年度からの継続事業で、事業計画をより明確にしたものです。このことにつきましては、宮下前会長が、『山』を通じて、皆さま方に強くアピールされておられますので、充分ご認識をいただいているものと理解しています。

ここに述べました課題は、お互いが関連し合っていますので問題をより複雑化させ、解決をより困難にしているのです。従いまして、なかなか一朝一夕に解決は図れません。きちんと仕分けをして一つ一つ着実に解決に向けての手段を構ずるしかないと思います。

四つのプロジェクト

そこで、それらへの対応として、次の四つのプロジェクトチーム（PT）を立ち上げました。1・JAC−YOUTH PT、2・支部活性化PT、3・法人改革対応検討PT、4・山の日制定PTです。

JAC−YOUTH PTは、若い会員の育成と若い人の入会促進を図ることが目的です。具体的な事業としては、非会員を対象とした各種の講習会や催し。若い会員のレベルアップを目的とした研修会。各支部の若い会員との提携。さらには、日本のトップクライマーの交流の場の提供など、会員、非会員を問わず若い人たちを日本山岳会に目を向けさせる試みです。その延長線上に、高レベルの海外登山の実践も視野に入れています。

チームリーダーは、若い人たちから信頼を集めている古野淳会員にお願いしました。メンバーには、理事の若い人たち全員に加わってもらう一方、支部からも、またプロの登山家にも加わってもらっています。また、これらのプロジェクトを成功裡に遂行させるための責任者として総括担当者をおくことに決めました。JAC−YOUTH PTの総括担当者には、私自身がその任に当たります。

支部活性化PTは大きく分けて三つの目的を持っています。一つ目は全国の支部化です。今年の2月には、東京・多摩支部が誕生します。また春には、埼玉支部の設立が予定されています。全国各地の支部化を促進させるのと同時に、首都圏の支部化が急務です。各支部の動きを見ますと、支部員の皆さまが、活き活きと支部活動に参

画し、活躍されています。一方、首都圏の会員の皆さまは、誠に残念なことですが一部の方を除いてほとんどが、日常の活動に参加されていません。『山』と『山岳』を受け取るのみというのは、どう考えても淋しい限りです。首都圏の会員の方々へのクラブライフを楽しむ場や活動の機会の提供は、絶対必要であると考えます。ぜひ、首都圏の支部化に積極的なご発言の出ることを期待するところです。

二つ目は、新公益法人制度移行への支部の対応です。新しい公益法人法への体制を来年には、構築したいと目論んでいます。これにはどうしても公益事業活動がついて回ります。積極的な公益活動の展開が支部には求められるのです。

三つ目は、支部の活動の活性化をベースに、会員の増強をお願いしたいと思います。できれば、若い人をというところですが、まずは、支部員を増やして下さい。支部の仲間をたくさん集めて下さい。

このプロジェクトのリーダーには、長年、山岳会で活躍されてきた石橋正美会員にお願いしました。総括担当は、日本はもちろん世界の登山界に精通されていて、全国の支部に最も顔の売れている神崎忠男副会長にお願いしました。

法人改革対応検討ＰＴですが、これは一昨年施行された新しい公益法人法への私たちの会のスムーズな移行を実現させるのが目的です。現在二つある選択肢の公益社団法人と一般社団法人のメリット、デメリットを抽出して、それを会員の皆さまにお示し、総会の審議事項として上程させていただく準備をしています。新法の運用基準がここにきて施行当初より若干緩和されてきたようで、愁眉を開く思いです。

チームリーダーには、最もこの問題に通暁している吉永英明会員にお願いしました。実情に明るい会員をメンバーに加える一方で、コンサルタントとして専門家にも加わってもらっています。総括担当には、実業界で実務経験豊富な藤本慶光副会長にお願いしました。

山の日制定ＰＴです。自然の源は、山にあります。雲が湧き雨が降り、まず初めに山に注ぎます。それが谷川となり、大河となって海に注ぎます。この自然のサイクルが、生物の多様性を育み、豊かな生物の繁栄を導きます。今日、このサイクルに異変が起き、生態系の正常な存続が危ぶまれています。今こそ、山の大切さを知り、山の自然を守り、山を考える場として「山の日」を制定しようという事業計画です。

日本山岳会が単独で動くのではなく、ほかの友好山岳団体や多くの自然に関わる組織にも呼びかけ、さらには、メディアも巻き込んで全国展開を図ろうとするものです。

チームリーダーは、マスメディア出身の成川隆顕常務理事です。総括担当には、法人検討ＰＴと同じく藤本副会長にお願いしました。

活発な意見交換の場を

現在この四つのプロジェクトは、有能なチームリーダーのリーダーシップのもとで順調な立ち上がりを見せています。さらにはこの四つのプロジェクトには、理事会構成の全理事がいずれかのチームに加わってもらい、理事会との乖離を防ぐようにしました。

組織のなかでは、プロジェクトは、タスクフォースです。その目的が果たされた時に解散します。一方、ルーチン部門は、委員会に当たります。図表に例えれば、横軸に委員会、縦軸にプロジェクトチームということになり、どちらが上とか下という関係ではありません。お互いが、補完することによって、相乗効果が発揮され、機能や成果の増大が期待されます。

私は、この半年間、できる限り各地の支部の皆さまとの語らいの場を作ってまいりました。常務理事会でも忌憚なく意見交換を重ね、理事会でも特に宮下前会長のご配慮で理事会へ送り込んでいただいた若い理事諸君とも熱い会話を交わしています。その対話のなかから、日本山岳会を何とかしなければならないとの共通の強い思いと認識を感じ、何となく明るい兆しを見い出したような気がします。

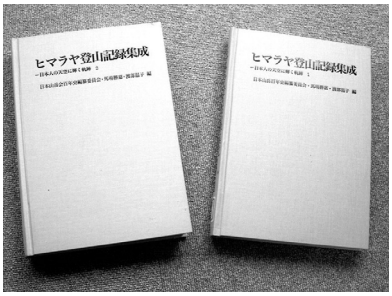
冒頭に「日本山岳会の再生と復権をめざして」とさせていただきました。再生とは、かつてのように若い会員で溢れ、活気に満ちていた日本山岳会の姿を甦らせることです。そして復権とは、かつて日本山岳会が日本の登山界を引っ張っていたように、そのリーダーシップを取り戻すことなのです。

会員の皆さま方、どうかこの「再生と復権」にご理解いただきご協力下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

トピックス

『ヒマラヤ登山記録集成』（全二巻）が秩父宮記念山岳賞を受賞

水野　勉



努力が認められた２冊の『ヒマラヤ登山記録集成』

この本については、すでに『山岳』第百三年において、松田雄一氏が詳しく紹介しているが、このたび、秩父宮記念山岳賞を受賞したので、個人的に感じたことを簡単に記しておきたい。

著者の馬場勝嘉氏は１９５０年代からヒマラヤの登山記録をまとめることに努め、『山岳』に断続的に６回発表している。最初のうちは、田中栄蔵氏との共編であったが、１９８０年代からはひとりで行なってきた。しかし、これは国際的なヒマラヤ登山記録であって、資料を収集するのに、日本人としては不利な面があったことは否めない。国際的に求められたのは、日本人によるヒマラヤの登山記録であった。日本語が国際的に広く通用する言語ではないから、日本語で発表された記録は読まれない場合が多いのである。

それでもなお、著者は金沢という、資料収集に不利な場所に住みながらも、日本人のヒマラヤ登山記録の集成を熱心に行なってきた。

私もかつて、『山岳』編集者として、日本人の海外登山記録を、失われないうちに１年ごとにまとめようとしたことがある。それらは『山岳』第七十八年、第七十九年に掲載されているが、その記録収集の苦労は大変なものであった。そのためか、その後の編集者によっては、この仕事は受け継がれずに終わった。

著者は前述したように、すでにヒマラヤ登山記録をまとめたことがある。今度は日本人でなければ不可能に近い、日本人によるヒマラヤ登山記録集成をひとりでコツコツと努力していた。

そのことを日本山岳会百年史委員会が知り、『百年史』のなかに入れようということになった。ただ、著者のやり方に問題があった。古いワープロで打ち込んでいたので、フロッピーに記録することができなかったからである。まして、パソコンに入れるフロッピーに転換もできなかった。また、記録集成も完成していなかった。したがって、著者が古いワープロで印字した文書を新しくパソコンに入れる作業を、著者のまとめの作業と同時に進めていった。

もうひとつ難点があった。それは記録の膨大さである。百年史委員会の予算からいって、とても掲載は不可能であったので、委員会としては、パソコンに入力し、いつでも印字できる態勢を整えるだけで精一杯であった。

しかし、著者はそれに満足せず、独力で私家版として出版することにしてできあがったのが本書である。著者の苦労と努力は想像して余りある。著者が「あとがき」で書いているように、完璧なものではないかもしれないが、ヒマラヤ登山史の資料として重要、かつ不可欠なものであることは誰しもが認めるところであろう。

しかも、特筆すべきは、著者が80歳を越えて完成させたことである。仕事の成果は年齢に関係ないという考え方もあろうが、私としては生身の人間がやる仕事は、年齢を抜きにしては考えられないのである。老齢にもめげず、この膨大な記録をまとめた著者の努力と気力には深大なる敬意を表したいと思う。

レポート

登山界はいま――④ＪＡＣの課題と展望

神崎忠男

登山界に課題が山積しているという認識では、誰もが一致している。「登山界」を「日本山岳会」と置き換えてもいい。日本山岳会は私たちの会だから、課題山積＝危機感はいっそう身近に感じられる。若者の山岳会離れ、高齢化、グループとしての縮小傾向……。要するに山岳会に席をおいていることに魅力がなくなりつつある、という現実である。

そうした全体傾向に、行政までが新しい法人制度への対応という踏み絵を迫っている。新法人移行問題を単純に言えば、社会貢献をベースに「公益法人」を選ぶか、仲間同士の登山、クラブライフを楽しむ「一般法人」をとるか、となるが、コトはそう簡単には割り切れない。会員の会費で営々と会の基盤を築いてきた当会にとっては厄介かつ迷惑な話である。しかしここは、「公益」か「一般」かの選択を機会に、会員みんなで足元を見つめ直し、将来のあるべき姿を探る好機と受け止めて、前向きに対処したいと思う。

尾上会長は就任以来、課題を4つに絞って会運営に取り組んでいる。法人選択とともに重視しているのが支部の活性化・首都圏の支部化推進である。支部活動のさらなる活性化に伴い、会員一人ひとりが地域に密着してクラブライフを楽しむことができるのが理想だ。東京・多摩支部の設立（2月20日に設立総会）、埼玉支部準備などプロジェクトは着実に進んでいる。

理事会、委員会活動が中心の現在の本部活動は、活発な支部活動を基盤として、全体としての会の企画、運営、社会貢献、国際交流、情報交換などと取り組むことになろう。会員としての誇りや自信を持ち、活力にあふれた日本山岳会づくりが目標である。

次いで「ＪＡＣユース」が取り組む若者対策。「日本山岳会の枠組みを超えて、まずは日本の若者を山に向かわせる環境づくりを、具体的な事業計画として取り組みたい」（尾上会長）として、新任の理事たちにハッパをかけている。新しい発想と企画力、意欲と技術を持つ若者たちに広く参加を呼びかけ、若年層を育てたい。

4つ目の課題である「山の日」制定は、山岳界にとどまらず国民運動としての広がりを持つプロジェクトである。祝日としての「山の日」制定は、登山愛好者のクラブ組織である日本山岳会が掲げる目標として遠く感じられる向きもあろう。要は、山に親しみ、楽しみ、山との触れ合いの大切さを伝える運動なのである。ひとつひとつのイベントを積み上げて機運を醸成し、日本山岳会でしっかりした基礎固めがしたい。それには何よりも、各支部の創意と工夫、行動力が期待される。日本山岳協会をはじめとする山岳団体などと連携して、地域、地方自治体へと運動の輪を広げ、共通の目標とすることが肝要だと思う。日本山岳会には主として首都圏の会員によって運営されている18の委員会がある。執行部では昨年8月、すべての委員会から活動報告を受けた。このヒアリングで話し合われた問題点などは今後の会運営につなげたい。同じく同好会、同期会も、組織のなかでの位置づけをチェックしていく必要があろう。

日本山岳会にとっていま最も重要な課題は、支部活動の更なる活性化であり、それが展望を開くカギを握っていると思う。ちなみに、昨年2月の全国支部事務局担当者会議で行なったアンケートによるいくつかのデータを紹介したい。

全国28支部のうち、6割の18支部が日本山岳協会＝県岳連と交流を持っている。27支部が定例山行を実施し、10支部がなんらかの形で森づくり活動を行なっている。18支部が会友制度を導入し、5支部が支部会室または借り事務所を持っている。支部会費を徴収しているのは20支部、年間1000円から6000円とまちまちであり、会費の多寡が活動内容の密度に関係するのは避けられない。限られた資金で、どう運営するのか。本部と同じ悩みを抱えている。

どこに活路を見出すか――。支部ブロックや本部とのコミュニケーションをより緊密に保ちながら、支部活性化＝ＪＡＣ全体の活性化に道を切り開いてゆきたい。

ピープル

テント作りの名匠　吉田喜義さんの功績

羽田栄治

明治の気骨をもったテント作りの名匠、吉田喜義さんが老衰のため昨年11月12日に亡くなった。99歳、テント作りを天職にした生涯であった。11月14日に行なわれた告別式の祭壇には日本山岳会を始め、慶応、明治、早稲田などの大学山岳部ＯＢ会からの生花が寄せられ、吉田さんの功績が偲ばれる。

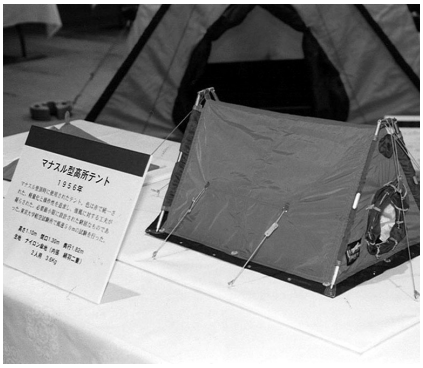
登山の発展を陰で支えた吉田さんは、明治43年8月5日、埼玉県寄居に生まれた。大正11年、港区芝通りにある「水野兼治郎商店」に奉公。昭和の初め、店に近い慶応義塾大学山岳部からイギリス製のテントを見せられ注文に応じた。それがきっかけとなってテント作りを始めたという。以来、テントや登山用具作り一筋の道を歩むようになった。

テント作りの名匠、吉田喜義さん

見習から丁稚へと修業を重ね、昭和16年から18年の召集を経て再び奉公を続ける。その間に大学山岳部の学生たちとの付き合いも欠かさなかった。彼らの応援もあって昭和18年の末、新宿に自分の店「吉田喜義商店」を開業する。だが戦時中のこと、テントどころではなかった。

昭和21年5月、杉並に移った。材料不足な時代ではあったが、ともかく注文を取ることから始めた。慶応、明治、法政、学習院などを自転車で巡り注文に応じながら意見を聞き、設計、改善などを模索しながらテント作りに専念した。こうした熱意が実り、当初の仕事は、昭和27年の日本山岳会マナスル踏査隊や早稲田大学アコンカグア遠征隊のテント作りとなった。

マナスル遠征は、昭和28年の第一次隊を皮切りに、29年の第二次隊、そして31年は念願かなって第三次隊が登頂を果たした。いずれの隊もほとんどは、吉田さんの手がけたテントを使用した。遠征の都度、反省と研究、そして改善が加えられた。第三次隊の快挙を知った吉田さんは「現地で使用したテントは約40張り、強風や寒さに耐え、損傷がひとつもなかったのが何よりも嬉しい」と言う。誇り高き職人の心境であろう。



平成11年の年次晩餐会に展示されたミニテント

マナスル隊のテントを手がけて半世紀、その間に昭和45年、日本山岳会エベレスト登山隊や、53年、植村直己北極圏単独犬ゾリ行などのテントや装備類を手がけ、受注した山岳極地関係だけでも、およそ80隊に及んでいる。

昭和54年、独特の優れた技能をもつ「現代の名工」として、吉田さんは卓越技能賞を受賞する。その時、慶応山岳部の仲間らが盛大な祝賀会を開いてくれた。記念品には最年長の谷口現吉さん（慶応山岳部ＯＢ、日本山岳会名誉会員）が代表して誌文を書いた銅版を贈り、喜びの盃をあげた。

昭和56年には勲六等単光旭日賞の叙勲を受けた。

平成2年8月、「株式会社ヨシダテント」と社名を変更。当時はまだ現役、ミシンを踏む表情は生き生きとしていた。平成11年12月の日本山岳会年次晩餐会では特別展示に吉田さんのテント14張りを展示。戦前のものからマナスル登山、植村直己さんの北極行など、いずれもミニテントだが、90歳近い高齢にもかかわらず来場され会員に熱心に説明されていた。

吉田さんについて元会長の大塚博美さんは、「世界一の天幕作り」と、前会長の宮下秀樹さんは「利用者の体験に耳を傾け、飽くなき研究心がすごい」という。こうした職人技のテントが日本の高所登山の陰の力となって支えてきた。

世界の高峰に実績を刻んできた吉田喜義さん、今、エベレストより高い天国で自分のテントを張り、ゆっくりとお休みください。

西北東南

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

直江兼続と朝日軍道

木村喜代志

朝日連峰の主稜線、狐穴・以東岳の間の南斜面と西朝日岳の南東斜面に、今日でもわずかながら目でたどることのできるジグザグの古道がある。風雪にさらされ、草木に埋もれているが、戦国動乱の歴史を深く刻み込んだ「朝日軍道」ではないかとされている。この古道を庄内側、旧朝日村鱒淵から、戸立山、茶畑山、三角峰、以東岳、狐穴、三方境、寒江岳、竜門山を経て大井沢に下山する春山ルートとして、30余年前に利用したことがあった。甲ト明神（兜岩）の奇岩が立ちはだかり、氷結したブナ原生林が林立していた。

朝日連峰の歴史をひもとくと、役ノ小角開山説や細々とした山岳信仰・修験道登山などが出てくる。しかし、近代登山の開拓期は、大正年代の沼井哲太郎氏の驚異的な足跡、朝日鉱泉の案内人・吉川房吉氏、山崎浩良氏、大江平助氏、山形高等学校山岳部などの活躍期となる。ところが昭和初期、稜線上に残る古道に注目した佐藤栄太氏によって、「朝日軍道」が公表された。原始性の高い朝日連峰に、戦国動乱の古い歴史が刻まれていたのだ。軍道開伐の年代は推定の域を出ないが、草岡文書によると慶長4年1月26日、源右ェ門という人が上杉藩から庄内新道の御小屋番をおおせつかっている。

当時の社会情勢をみると、陸奥会津を領していた蒲生氏郷の死後、豊臣秀吉の命を受けた上杉景勝が慶長3年会津に移り、会津4郡をはじめ仙道7郡と出羽国長井、田川、櫛引、遊佐の各郡、佐渡国3郡を合わせ120万石の大封（領地）を受けることになった。そのうち米沢と庄内の30万石を上杉の武将、直江兼続が領有したとされている。

秀吉の死後、上杉は豊臣に、最上は徳川につき、庄内を巡っての争いは激しさを増していった。兼続にとり本拠地の米沢と庄内とを結ぶ連絡道は、一旦越後に出てから庄内に向かうか、小国を経て村上に出る方法のみであった。宿敵最上を前にして、一朝ことがあれば米沢と庄内が分断される恐れが多分にあった。それで、関ヶ原の合戦を控えた兼続は、自領の朝日連峰の主稜線をたどり、一路直ちに庄内に達する軍用道路開伐の大土木工事を起こしたことは容易に想像できる。

以上のことから、完成を慶長3年とすると、兼続が入領した年にあたり、一夏の工事ということになる。海抜1500㍍から1800㍍における大工事なので、かなりの人海戦術が取られたことであろう。同時に、この軍道に注いだ兼続の気迫のようなものをも感じとれる。

この軍道の経路を記載した「出羽庄内大山尾浦尉山階道　みち行改帳」や、これまで発表されたものおよび鱒淵で耳にしたことなどによると、鱒淵を基点として鱒淵沢にかかる長慶滝を経て、通称鱒淵山（778㍍）に達し、鍬台置、猿倉山、早坂七十三曲、甲ト明神、高安山、御小屋の平、葛城山、芝倉山、茶畑山、戸立山、三角峰、ウツボ峰、以東岳、狐穴、三方境、北寒江山、竜門山、西朝日岳を経て大朝日岳に達し、三十三曲坂、平岩山、御影森山、焼野山、葉山神社を経て草岡に達している。距離にして約60キロにもおよぶ大規模なものである。

昭和初期には、兜岩北面はじめ、戸立山と以東岳の間、以東岳と狐穴の間、西朝日岳南面、御影森山西面、焼野平と葉山の間に、その痕跡を認められたと佐藤栄太氏によって報告されている。しかし、今日では狐穴と以東岳の間、西朝日岳南面にわずかに雷光形を遠望できるにすぎない。近づいて見るとチシマザサやシャクナゲが密生しており、軍道をたどるどころかその存在すら確認できない。

日本に残る有名な軍道として、信州の大門峠（1442㍍）や、信州と飛騨の国境である安房峠

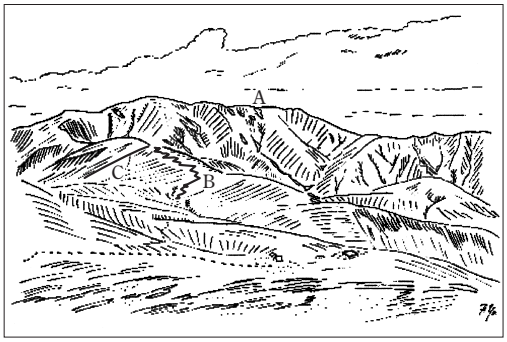
（1812㍍）、越中と信州を直接結んだザラ峠（2353㍍）、針ノ木峠（2541㍍）などが知られている。これらは朝日連峰を凌ぐ高さだが、すべて峠越えである。

これに比べて朝日軍道は、東北の豪雪地帯に横たわる主稜線をえんえんとたどるものだけに、単に高度だけでは比較できない困難さがあったと思われる。それにもかかわらず、人知れず歴史に埋もれ、陽の目を見ないままに消え去ろうとしているのは、軍道の宿命でもあり、東北という地域柄だろうか。

慶長5年、天下分け目の関ヶ原の戦いと共に上杉と最上の戦いが始まった。文書には残っていないがこの軍道は重要性を増し、人馬の往来、物資の輸送とかなり利用されたと思われる。上杉勢は最上口と六十里越から攻め込み、最上勢の背後を突き圧倒していたが、関ヶ原での豊臣勢の大敗をきっかけに形成は逆転し、上杉勢は米沢に総退却を余儀なくされてしまう。

庄内東禅寺（酒田）の城主・志駄義秀もその一人で、兼続の妻を伴い10月にこの軍道を通っている。陰暦の10月といえば、今日の11月末から12月初めであり、稜線は氷結し、季節風の一段と身にしみる完全な冬山であったと考えられる。しかも、庄内を案じ、敗残隊を引き連れての山越えは、氷雪に足をとられ、風によろめき、新雪に身を埋めての行軍だったと思われる。

現在、この軍道があったとされる尾根筋の約3分の2、すなわち鱒淵から草岡までのうち、三角峰（かつては茶畑山）から草岡までは、軍道がそのままではないにしてもほぼ登山路として利用されている。しかし、茶畑山以北の庄内側は寛文年間、酒井候の入国以来放棄され、草木に埋もれ、戦国動乱の歴史を溶かし消し去って今日に至っている。



三方境より狐穴、以東岳方面を望む
A：以東岳、B：朝日軍道、C：現在の登山路

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

総務委員会

09年度、新入会員オリエンテーションを開催

昨年11月7日、41回目の新入会員オリエンテーションを開催。対象新入会員は14551番から14654番の104名、参加者は32名だった。

推薦者に働きかけたことが功を奏し、対象新入会員は少なかったものの、30㌫が参加するという近年にない高い出席率となった。また、オプション企画（記念山行）の影響か、北上市や神戸市、糸魚川市など遠方からの参加者もあり、地方色豊かな集まりとなった。

13時30分、石光総務委員長の司会で、まず宮崎副会長の開会の言葉に続き、尾上会長のあいさつがあった。日本人と山の関わりから、当会の成り立ち、英国山岳会の影響、会員は皆同じ仲間であり上下関係がないという当会の会風が紹介された。

次に藤田委員が山岳保険について、宮崎副会長が上高地山岳研究所の説明をした。続いて、永田が当会の説明を行なった。

後半は、染谷委員司会による「自己紹介と意見交換」。

エベレストの登頂者から、地元の山歩き、クライミング、トレイルランニング。自然保護に興味をもって入会した人、エイジングケアのために入会した人。いつもながら、登山経験や経歴、趣味、特技は多種多様で、会員の層の厚さを物語っていた。

すでに会員として活動している人も数人おり、今回は特に積極的な人が多かったように感じられた。しかしみな、仲間を求めて、また新しい活動の場を求めて入会してきた人たちだ。

最後に、各委員会、同好会から

新入会員に向けた熱心なＰＲがあり閉会。17時すぎから会場を変えて懇親会が行なわれた。

翌８日、オプションとして、高尾山への記念山行（岡田委員担当）が行なわれた。試しに催した山行だったが、参加者13名（配偶者１名の参加があり計14名）と好評であった。

（永田弘太郎）

集会委員会

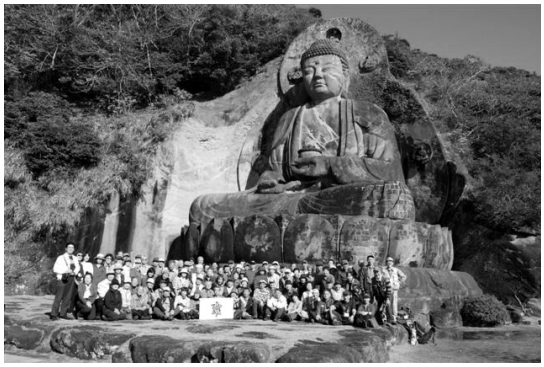
晩餐会記念山行――鋸山

09年12月６日、晩餐会記念山行（千葉県鋸山）に参加した。参加者は93名であった。品川駅を出ると、ＪＡＣの小旗を持った係りの方の誘導で集合場所へ。２台のバスに分乗し、８時過ぎ出発した。アクアラインは海ホタルを起点に海底と海上交通に分かれる。

朝霧の眩しい光の海ホタルを通過。木更津で小休止後、バスは保田へと進む。昨夜の晩餐会時の雨とは異なり、穏やかな海の色、小船が多数出漁している。

車窓より紅葉が美しい。富士山の姿も垣間に見られ、だんだん霧が濃くなり、また薄くなる。朝日が強く、やがて山影が見え保田の鋸山入口に到着、千葉支部の方々が出迎えてくれる。

鋸山は乾坤山日本寺と称し、西暦７２５年開かれ、関東最古の勅願所へこれより入山である。仁王門より観音堂、石段が続き一心池、千体観音の石仏に迎えられ大仏通りを過ぎ、百尺観音を拝す。交通安全の守り本尊で、石を切り出した岩に安置されている。石段を少し戻り登り返すと、オーバーハングの山頂、地獄覗きで下は紅葉、遠く見渡せば海が白く輝き美しい。山頂を後に大仏広場へ、今朝までの雨で泥だらけだ。



快晴の大仏広場で記念撮影

千葉支部の方々による豚汁が用意され、昼食。どこかで見ていたのだろうか、上空に鳶が旋回、序々に高度を下げ始め、鳶は狙いを定めている様子。眼球がくるくると動く。急いで豚汁を足元に隠すと、方向を変え反対側へ回った。と急降下、襲撃に合ってしまった。

帰路、海ホタルに立ち寄る。海上より丸い風車型の風の塔や品川方面のビルなど視界良好。

これより海底に入り、品川に着いた。

（長谷川公子）

アルパインフォトビデオクラブ

2009年秋の撮影会

09年10月24日～25日、磐梯朝日国立公園吾妻連峰で撮影会が行なわれた。６年前お世話になった吾妻小舎を今年も使わせていただいた。小舎の主人・遠藤氏とは毎年松坂屋で開催する夏山相談所で一緒になりフォトクラブとは知己の間柄なので、撮影地などいろいろな点で便宜をはかっていただいた。

参加者12名（うち女性４名）がそれぞれのポイントで撮影をして、16時に全員が小舎に集結した。小屋の階段を登りきったところにＪＡＣのマークのついた鐘がさがっていた。その理由を遠藤氏にうかがったら、福島支部35周年記念に作ったものだという。

懇親会にさきだち、富士から参加した石浦氏より写真集『安曇野の思い出（自然と人）』（石浦邦夫・著）を参加者全員に配られた。四季織りなす安曇野に魅せられ、撮り続けている氏の姿に感動を覚えた。

楽しみの懇親会は川嶋副代表のあいさつ、乾杯の音頭で始まった。今回、出席できなかった羽田代表から大量の差し入れがあり、会に花を添えていただいた。小舎の山菜料理はおいしく疲れを癒してくれた。今回もまた、北村氏よりデジタル写真の話を聞き、写真談義に花が咲いた。

25日の朝は夜来の雨はあがったが霧が深い。朝食後、撮影地を磐梯高原に求め、今を盛りの色鮮やかな母成高原を撮影し、最近話題の撮影ポイントとしてクローズアップされている観音沼を撮りながら帰途についた。

（山本武志）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

北海道支部

北海道山岳団体交流会開催

09年10月23日。北海道の主な山岳団体（北海道山岳連盟、北海道勤労者山岳連盟、道央地区勤労者山岳連盟、札幌山岳連盟）、そして日本山岳会北海道支部の5団体の有志（役員）が集まり交流会を持った。30数名の集まりとなった。このような集まりは初めてのものだという。主旨は「北海道の山岳界の交流を推進するとともに、山岳と登山に関わる諸問題を話し合う場」をもとうということである。何やら堅苦しい目的のようであるが、要はいろいろな会に属している山好きが一堂に会して肩組み合おうではないかということであろう。

これにはきっかけがあったように思う。2007年11月、私たちは上ホロカメットク山で最愛の岳友4名を失った。長い鎮魂の月日の最後に、お世話になった山岳団体の皆様をお呼びしてお礼の会を開いた。期せずして今回の交流会に参加している団体の会員の方がいらしたということだ。この時は4人のみたまにこの事故の苦い教訓を生かして、二度とこのような遭難事故を起こすまいと全員で誓ったが、合間あいまに他団体の岳友との語らいに思わぬ花が咲いた。

当日、幹事に「あの時の会合がヒントになりましたか」と尋ねると「そうです」という答えが返ってきた。幹事の皆さんのごあいさつのなかにも、上ホロの事故が契機になったと語られた。四君の引き合わせにより、この交流会がもたれたことは事実のようであり、改めて上ホロの空に舞う四君のみたまに報告をし合掌をした。

この日は当会の会員でもある十勝山岳連盟会長の太田紘文氏からの「09年トムラウシ山事故救助報告」（昨年7月、本州からのツアー客が旭岳方面からトムラウシ山に向かって縦走の途中、8名の死亡事故を起こした。盛夏に低体温症で大量の死亡者を出すという極めて珍しい遭難事故）と題してのお話を聞きながら、有意義な語らいの時を過ごしたのである。

道内の主な山岳団体から30数名が集まった

当会も、先日立ち上がった「山の日プロジェクト」について、来たるべき時には岳友が心を一つにして協力を賜るようお願いをした。ともあれこの交流会がセクトにこだわることなく定期的に開催され、北の大地に大輪の花を咲かせることを願ってやまない。**（滝本幸夫）**

秋田支部

秋田県標高第50番目の山
――花の咲き乱れる薬師岳へ

秋田支部設立50周年記念事業の一環として、秋田県で標高50番目（二万五千分の地図に記名のある山）に高い薬師岳への登山を09年7月12日に実施した。薬師岳は、真昼山地・薬師連山のひとつで標高は1218㍍。小杉山、小鷲倉を経て和賀岳へと連なっている。

午前6時、一行15名、4台の車に分乗して出発。真木渓谷入口で今野副支部長が合流する。渓谷美を誇る真木林道に入り、袖川園地を過ぎると現われる大倉岩を見上げながら進み、駐車場（旧マタギ小屋跡）に着く。この日は地元大仙市の開催する募集登山があり、駐車場は満杯状態だった。

7時40分、雲行きを心配しながら出発し、登山口の名水・甘露水に着く。駐車スペースは狭いが、普段はここまで車を乗り入れることができる。7時50分出発。登山口からまもなくトチやミズナラの生い茂る樹林帯を朝の鳥の鳴声を聞き、ヤマアジサイを見ながら高度を上げてゆく。

昨日の雨で湿気があり、そのうえ無風状態で汗だくとなる。辺りは美しいブナ林と変わり、ブナ台を過ぎ、8時40分、滝倉の水場に着く。沢の流れは冷たく、飲んでもうまい。以前はこの先に避難小屋があったが、今は影も形もない。代わりに下の駐車場に新しい避難小屋が建っている。

ブナの林は心が落ち着く。炎天下であれば直射日光を和らげ、雨であれば雨をも和らげる。九十九折の坂道が続き、9時30分に倉方に着く。これから先は稜線歩きとなる。曇り空からは薄日も射し、対岸の大甲山や曲甲山、中ノ沢岳、白岩岳や小滝山も望まれ、そして薬師岳の頂も見えてきた。

薬師平のニッコウキスゲに囲まれて

道は徐々に急になり、ハクサンフウロ、ゴゼンタチバナなどの花が現われる。風も出てきて涼しいほどだ。やがて、ニッコウキスゲの咲き乱れる回廊が現われ山頂へと導く。山頂には10時25分到着。薬師如来を祀る祠があり、それぞれ手を合わせる。和賀岳の雄姿も望まれ、梅雨の晴れ間を狙ったかのような天候となった。時間に余裕があるので、この先の薬師平まで足を延ばす。薬師平はニッコウキスゲが群生して咲き乱れ、まさに雲上の楽園、満開の時節にピッタリと本当にラッキーであった。

百花繚乱のもとで50周年を祝し、和気藹々とした昼食となった。

（柳田勇悦）

宮崎支部
第15回家庭裁判所短期少年補導委託登山

09年10月15日、第15回家庭裁判所短期少年補導委託登山を行なった。これは9月下旬に宮崎家庭裁判所から委託を受けたもので、双石山で実施した。双石山（509・3㍍）は宮崎近郊にあり、自然豊かで変化に富み、神話と伝説の山である。国の自然休養林に指定されている地域の山で登山口は数箇所ある。今回は小谷登山口より入山して、九平登山口に下山する約6㌔、4時間の行程である。

裁判所から委託された少年7名、保護者6名、家庭裁判所の調査官4名、宮崎支部会員12名の総勢29名が参加した。出発に先立ち9時30分から宮崎家庭裁判所において、オリエンテーションを開いた。宮崎支部会員のリーダーから、参加者に対し、山の概要、行程、登山上の注意などを確認後、車で登山口に移動した。

小谷登山口において班編成と準備体操、さらに再度登山の注意を行ない、10時30分に登山を開始した。歩くこと約30分、まず直立の波状岩に囲まれた通称天然クーラー「象の墓場」と呼ばれている巨岩に囲まれた広場に立ち寄った。休憩の後、三連梯子を登り、奇岩「針の耳」、大岩展望台を経て、急登の岩場を登り第二展望台に至った。

登り始めは緊張気味で態度も硬かった少年らは、時間が経つにつれて次第にうちとけ、笑顔で会員らに話しかけたり、山のことを質問するようになってきた。また、難所の岩場では保護者を気づかって手をさしのべ、休憩時には疲れた保護者にタオルで風を送るほほえましいしぐさも見られるようになり、少年らの態度の変化がとてもうれしく感じられた。

第二展望台では、快晴のもとさわやかな秋風を受けて、宮崎平野や日向灘の眺望を楽しみながらの昼食で、もうそこでは全員が山の仲間であった。昼食の後、照葉樹林に覆われた木漏れ日の射すアップダウンの尾根道を経て、約40分で山頂へ到着。あとは下山口まで下り一辺倒のジグザグ山道が続いた。途中にある姥ヶ獄神社に立ち寄り思い思いの祈願をこめて参拝し、14時30分に下山した。

下山後の閉会式で少年らに感想を聞くと「登るときはきつかったけど楽しかった。この体験をこれからの自分たちの生き方に活かしていきたい」と力強い言葉が返ってきた。山岳会の会員として、登山を通じて明るい社会の実現のために微力ながらも貢献できたという満足感と喜びを味わうことができた。

（末永軍朗）

164	開墾の記	坂本直行	茗渓堂	1975　カバー　著者署名あり	800
165	わたしの草と木の絵本	坂本直行	茗渓堂	1976　カバー　著者署名あり	1200
166	山・原野・牧場	坂本直行	茗渓堂	1975　カバー　著者署名あり	800
168	明治の山旅	武田久吉	創文社	S 46　函　著者署名あり	800
170	ヒマラヤの花	中尾佐助	毎日新聞社	S 39	2000
173	大興安嶺探險	今西錦司 / 編	毎日新聞社	S 27	1500
176	増補版　今西錦司全集　別巻　年賦・主要著作目録・総目次・登頂山名リスト		講談社	1994　函	1000
178	復刻　日本の山岳名著　解題	日本山岳会 / 編	大修館書店	S 50　函	800
179	新選　復刻　日本の山岳名著　解題	日本山岳会 / 編	大修館書店	S 53　函	800
185	北海道のスキーと共に	大野精七		S 46　函	800
209	黒部谿谷	冠松次郎	アルス	S 3　5版	800
269	一日二日山の旅・静かなる山の旅	河田　楨	木耳社	S 53　函　復刻版	1000
271	復刻　泉を聴く	西岡一雄	サンブライト出版	S 54　函　諏訪多栄蔵編の「回想」付	1000
283	ヒンズー・クシュ　カラコルム研究誌 / ヒンズー・クシュ　カラコルム登山探検誌	高木泰夫 / 編	日本ヒンズー・クシュ・カラコルム会議	1980　函	800
317	山の天辺	赤沼千尋	東峰書房	S 50　函	800
348	現代紀行文学全集　山岳篇　上・下 2 巻	志賀直哉・佐藤春夫・川端康成 / 監修	修道社	S 41　函	800
408	復刻　日本アルプス　第一巻	小島烏水	大修館書店	S 50　函	800
409	復刻　日本アルプス　第二巻	小島烏水	大修館書店	S 50　函	800
410	復刻　日本アルプス　第三巻	小島烏水	大修館書店	S 50　函	800
411	復刻　日本アルプス　第四巻	小島烏水	大修館書店	S 50　函	800
412	復刻　THE JAPANESE ALPS	WESTON	大修館書店	S 50　函　アンカット	800
413	復刻　スウィス日記	辻村伊助	大修館書店	S 50　函	800
414	復刻　ハイランド	辻村伊助	大修館書店	S 50　函	800
415	復刻　山　研究と随想	大島亮吉	大修館書店	S 50　函	800
416	復刻　山行	槇 有恒	大修館書店	S 50　函	800
417	復刻　雪・岩・アルプス	藤木九三	大修館書店	S 50　函	800
418	復刻　北の山	伊藤秀五郎	大修館書店	S 50　函	800
419	復刻　日本山嶽志	高遠 式	大修館書店	S 50　函	800
420	復刻　日本風景論	志賀重昂	大修館書店	S 50　函	800
421	復刻　山の憶ひ出　上巻・下巻	木暮理太郎	大修館書店	S 50　函	1600
423	復刻　尾瀬と鬼怒沼	武田久吉	大修館書店	S 50　函	800
424	復刻　山と雪の日記	板倉勝宣	大修館書店	S 50　函	800
425	復刻　黒部谿谷	冠 松次郎	大修館書店	S 50　函	800
426	復刻　氷河と万年雪の山	小島烏水	大修館書店	S 50　函	800
427	復刻　アルペン行	鹿子木員信	大修館書店	S 50　函	800
428	復刻　山岳省察	今西錦司	大修館書店	S 50　函	800
429	復刻　日本アルプスと秩父巡禮	田部重治	大修館書店	S 50　函	800
430	復刻　会報　1 ～ 100	日本山岳会	大修館書店	S 50　函	800
431	復刻　日本の山岳名著　解題	日本山岳会 / 編	大修館書店	S 50　函	800
408 ～ 431	全23冊一括購入の場合				15000
432	世界山岳全集 1 ～ 13	日高信六郎・藤木九三・深田久弥 / 監修	朋文堂	S 36　函	各300 一括3000
525	深田久弥　山の文庫　1 ～ 6	深田久弥	朝日新聞社	文庫本	各300 一括1500
554	大判地図　飯豊連峯　50000分の 1	藤島 玄 / 編	新潟県・山形県・福島県	1962　裏面に解説・ガイド付き	1000
555	大判地図　朝日連峯　50000分の 1	藤島 玄・後藤幹次 / 監修	山形県・新潟県	1959　裏面に解説・ガイド付き	1000
556	大判地図　磐梯・吾妻・安達太良　60000分の 1	日本山岳会福島支部 / 監修	福島県	裏面に解説・ガイド付き	1000
557	復刻『山岳』総目次・総索引　第 1 年～第37年		アテネ書房	2007	1000
Y 1	SECRET TIBET	FOSCO MARAINI	HUTCHINSON&CO.LTD	1952　カバー　著者署名あり	1500
Y 5	THAT UNTRAVELLED WORLD	ERIC SHIPTON	HODDER AND STOUGHTON London	1969　カバー	1500
Y 6	ALPINE PLANTS of New Zealand	John Salmon	Wijjism Collins	1985	1000
Y 7	MOUNTAINS OF TARTARY	ERIC SHIPTON	HODDER AND STOUGHTON London	1951　カバー	1000

●頒布価格が700円以下の本を省略しています。全目録はホームページ（図書委員会）から検索できます。また、必要な方にはお送りしますので、お申し出ください。

●問い合わせは三好まき子まで　TEL 090−8019−8601　✉ 344mm@mbe.nifty.com

図書交換会出品目録および購入申込みのご案内

「図書交換会」を、3月6日（土）に開催します。多くの会員の参加をお待ちします。

交換会当日の詳細は18ページの「インフォメーション」に掲載していますが、当日に来場できない方は、下記の要領で購入の申込みを行なってください。

- 郵便（日本山岳会・図書委員会あて）またはメール（344mm@mbe.nifty.com）で、2月15日までにお申込みください。
- 購入希望図書の番号、書名、購入希望者の名前と会員番号を必ずご記入ください。入札本（★印1～6）の場合も、入札価格を明記のうえ、同じ要領でお申込みください。
- 複数の申込みがあった場合は、当日、会場で抽選を行ないます。来場できない方の抽選は、図書委員が代行します。全集は一括購入の申込みを優先させていただきます。
- 購入図書の送料は購入者負担とし、交換会終了後に代金と一緒に請求させていただきます。

番号	書名	著者名	発行	備考	価格
★1	辻まこと　山とスキーの広告画文集	辻まこと	秀山荘	S56　初版	入札(最低価格4000)
★2	辻まこと　山で一泊	辻まこと	創文社	S50　函　初版 著者署名あり	入札(最低価格4000)
★3	山を想へば	百瀬慎太郎	百瀬慎太郎遺稿集刊行会	S37　函	入札(最低価格5000)
★4	遠い山　近い山	望月達夫	茗渓堂	1976　2版　限定本100部の68　二重函	入札(最低価格5000)
★5	アルプスと人	松方三郎	岡書院	S23　カバー 著者署名あり	入札(最低価格3000)
★6	けものみち	鳥見迅彦	昭森社	1955　カバー 著者献呈署名あり	入札(最低価格5000)
11	奥秩父研究	原 全教	朋文堂	S34　カバー	800
16	登山の夜明け	熊原政男	朋文堂	S34　カバー	800
27	山の憶ひ出1～4	木暮理太郎	福村書店	S23　カバー	2000
31	山を見る日	川崎精雄	茗渓堂	S52　函　著者俳句署名あり	800
32	雪山・藪山	川崎精雄	茗渓堂	S44　函　著者俳句署名あり	800
36	山・人・本	島田 巽	茗渓堂	1976　成瀬岩雄あて献呈署名あり　函	800
37	山稜の読書家	島田 巽	茗渓堂	1985　函	800
38	わが登高行　上	三田幸夫	茗渓堂	1979　函	800
39	わが登高行　下	三田幸夫	茗渓堂	1980　函	800
50	原野から見た山	坂本直行	茗渓堂	S49　カバー　函	800
51	黄色いテント	田淵行男	実業之日本社	1986　3刷　函　カバー	1200
60	田淵行男山岳写真傑作集―アサヒカメラ臨時増刊	田淵行男	朝日新聞社	S26	1000
61	富士　MT.FUJI	岡田紅陽	朋文堂	S34　函　帯	1000
76	ヘディン素描画集	スウェン・ヘディン　ヨースタ・モンテル／編	白水社	1980　函	1500
78	辻まこと山の画文集―『岳人』の表紙の画と言葉	辻まこと	白日社	S57　函	2000
81	画文集　山の声	辻まこと	中日新聞東京本社	S46　カバー	2000
82	山からの絵本	辻まこと	創文社	S41　函	2000
83	すぎゆくアダモ	辻まこと	創文社	S51　函　帯	2000
84	山の風の中へ	辻まこと	白日社	S56　函	2000
85	山と森は私に語った	辻まこと	白日社	S55　函	2000
86	居候にて候	辻まこと	白日社	S55　函	2000
87	わたしの草と木の絵本	坂本直行	茗渓堂	1976　カバー	1000
92	写真集　ヒマラヤの高峰―深田久弥・山の文学全集別巻	深田久弥	朝日新聞社	S53　カバー	1500
97	明治日本の思い出―日本スキーの父の手記	デオトール・フォン・レルヒ　中野理／訳	中外書房	1970　カバー	1000
116	ヘディン中央アジア探検紀行全集1～11	スウェン・ヘディン　深田久弥／監修	白水社	1964　函	4000
120	新選復刻　名山図譜　全三巻	谷 文晁	大修館書店	S53　秩入り	1500
121	雲表を行く	冠松次郎	墨水書房	S17	800
122	わが山旅五十年	田部重治	桃源社	S39　カバー　函	800
127	新選復刻　山岳礼拝	中村清太郎	大修館書店	S53　函	1000
128	山と雪の日記	板倉勝宣	梓書房	S5　再刊	1500
129	霧の山稜	加藤泰三	朋文堂	S16　カバー	1500
134	画文集　山の声	辻まこと	東京新聞出版局	S56　3刷　カバー	1000
143	御嶽の歴史	生駒勘七	木曾御嶽本教	S41　函	1500

会務報告

平成21年度第8回(12月度)理事会

日時　平成21年12月9日　18時30分～20時30分
場所　日本山岳会会議室
【出席者】尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長・成川・岡部各常務理事、太田・相馬・山川・野澤・中山・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井各常任評議員
【委任】堀井・谷川理事
【欠席】森常任評議員

【審議事項】

1・商標登録（宮崎）

法人改革検討作業の一環として「社団法人日本山岳会」の商標管理について万全を期すため、専門知識を有する菅原修会員（菅原特許商標事務所、東京都八王子市）に照会してきた。その結果等を踏まえ、法令等に定める第35類、第39類、第41類、第42類についても商標登録（商標権の取得）をしていくべきと考える。また、現法人格での前記各分類への商標登録後に新法人への移行・改組した場合の対応等についても研究・検討をし、商標登録の確実性を図っていきたいと考える（説明の方向でさらに研究・検討することが承認された）。

2・プロジェクトチームメンバーの交代（神崎、成川、野澤）

●支部活性化プロジェクトチーム
山本憲一（会員No.12391　新任）

●山の日制定プロジェクトチーム
谷久光（辞任）、渡辺悌二（会員No.11314　新任）

●JAC−YOUTHプロジェクトチーム　藤井正善（No.7410　辞任）、永田秀樹（No.8020　新任）、井本重喜（No.14063　新任）、高橋玲司（No.12955　新任）

（承認）

【報告事項】

1・プロジェクトチーム報告（藤本、神崎、成川、野澤）

法人改革対応検討プロジェクトチーム（以下　PT）、支部活性化PT、JAC−YOUTH　PT、および山の日制定PTの活動・取り組み状況について報告が行なわれた。

2・山陰支部創立60周年記念祝賀会（会長）

11月28日に開催され、尾上会長が出席した。

3・秋田支部創立50周年記念祝賀会（宮崎）

11月28日に開催され、宮崎副会長が出席した。

4・支部長会議（宮崎）

12月5日（午前中）ルームで開催し、4つのプロジェクトチームの現況報告等が行なわれた。

5・年次晩餐会（宮崎）

12月5日、グランドプリンスホテル新高輪（東京都港区）で開催、出席会員は478名であった。

6・法人概況調査（宮崎）

文部科学省より調査依頼があった。例年に準じ回答する。

7・会報『山』12月号編集報告（神長）

ルーム日誌 12月

1日　総務委員会　図書委員会
アルパインスケッチクラブ
2日　常務理事会　総務委員会
集会委員会　山岳地理クラブ
3日　総務委員会　学生部　みちのり山の会
4日　総務委員会
5日　支部長会議
7日　総務委員会　高尾の森づくりの会
8日　集会委員会　二火会
9日　理事会　山想倶楽部
10日　アルパインフォトビデオクラブ　緑爽会　山の自然学研究会　00会
11日　図書管理委員会　学生部
14日　図書委員会　会報編集委員会　アルパインスキークラブ
15日　山岳研究所運営委員会　システムPT　アルパインスケッチクラブ
16日　三水会　つくも会
17日　科学委員会　千葉支部　麗山会
18日　資料映像委員会　会報編集委員会　法人改革PT
19日　SUN燦会
22日　インターネット小委員会
集会委員会　JAC－YOUTH PT　支部活性化PT　アルパインスキークラブ
24日　自然保護委員会　アルパインフォトビデオクラブ　山遊会
25日　図書委員会

12月来室者586名

会員異動（12月）

物故

小林忠治（5283）09・8・5
宮寺忠夫（7371）09・11・19
山本悦子（10863）09・12・1

退会

内田良平（6974）
佐々木松男（11443）北海道
水内　哲（11455）
鈴木一正（12030）
金子静美（12772）関西
早本和佳子（12807）山陰
江口富美雄（14619）関西

終身会員

澤登　均（6301）
藤井信一郎（6613）　山陰

マナスル遠征時使用の「ピッケル」寄贈

マナスル遠征隊（1953年～54年）の隊員として活躍された山田二郎（元会長・名誉会員）氏の使用したピッケル1本が、本人のご厚意により本会に寄贈されました。

このピッケルは札幌門田製で、フィンガー部分にローマ字でYAMADAと彫ってあります。

10月19日、資料映像委員会で受け入れました。

（資料映像委員会・石橋正美）

INFORMATION

インフォメーション

◆第27回図書交換会　図書委員会

本年は過去最高の約600冊の出品がありました。山岳古書を目にする絶好の機会です。気軽に参加しませんか（出品目録は14～15ページに掲載）。

日時　3月6日(土)13時より購入申込み・抽選を開始（12時から本の内覧ができます）。開始時間に遅れないようご注意ください。

場所　山岳会104号室

問合　三好まき子　TEL090－8019－8601　✉344mm@mbe.nifty.com）

◆第7回土曜懇話会　集会委員会／自然保護委員会協力

堂本暁子会員（元千葉県知事、評議員）に、「日本山岳会との60年　山に遊び、自然を学ぶ」をテーマにお話しいただきます。

日時　3月6日(土)15時より

場所　上智大学四谷キャンパス9号館256室

定員　50名

問合　清登緑郎　TEL03－5905－2862　✉rokurou.kiyoto@grp.tmnf.jp）

◆フォーラム『登山を楽しくする科学Ⅱ』開催　科学委員会

内容　低体温症の生理学（塩田純一）、カミナリの新理論（芳野赳夫）、温泉の自然学（福岡孝昭）、森林セラピー入門（平野裕也）

日時　3月22日(祝)13時～16時30分

会場　東京しごとセンター　地下2階講堂　TEL03－5211－1571　JR飯田橋駅より徒歩7分）

定員　200名（定員で締切り）

資料代　500円

申込　平野裕也（〒157-0066 世田谷区成城4－33－5－202　FAX03－3484－8968　✉jacforum@31pc-seijo.com）

◆第19回「山好きの山の絵展」　アルパインスケッチクラブ

今回はイベントとして、B1エメラルドルームにおいて女性会員有志による特別展を同時開催いたします。

会期　2月21日(日)～27日(土)（10時～19時、ただし初日は12時から、最終日は17時まで）

会場　東京交通会館2Fギャラリー（千代田区有楽町2－10－1　TEL03－3215－7962）　最寄り駅：JR有楽町駅、地下鉄有楽町線有楽町駅A8番出口）

担当　田辺寿、深川安明、木村泰助

＊入場無料

◆「紫蘭会」創立35周年記念　――人と自然との出会い

女性だけの登山同好会ならではの講演（小倉董子「小倉董子の山歩き賛歌」）、トークショー、コーラス、展示などを行ないます。

日時　2月10日(水)～12日(金)

場所　江東区文化センター（ホール・展示室）

■訂正とお詫び

12月（775）号、15ページ1段5行目から7行目にかけて、「三校」が「三高」、「今西錦司、西堀栄三郎らの薬師岳カールの踏破」が「桑原武夫らの白山・尾上郷川遡行」の誤りでした。

ともに訂正してお詫びします。

谷川岳山岳資料館

〒379-1728　群馬県利根郡みなかみ町湯檜曽湯吹山
TEL & FAX 0278-72-6446

――「アルピニズムと遭難の山の歴史」と「ヒマラヤ登山」――

MOUNTAIN MUSEUM
山の博物館訪問

入館料　無料
開館時間　9：30～16：30
休館日　木曜日
交通機関　電車：JR東日本、上越線「土合駅」より徒歩15分　バス：谷川岳ロープウェー「土合口駅」より徒歩２分
＊冬期間は閉館（11月下旬から４月下旬まで）

「谷川岳からヒマラヤへ」は谷川岳登攀パイオニアーの１人、高木正孝の一文（『岳人』60号）だが、大正末期に『山岳』第十六年三号（大正12年５月刊）「奥上州号」で上越山域が「アルプスに劣らぬ魅力ある山」と紹介された。その後、昭和２年、慶応大学の大島亮吉が集中的に注いだ情熱が「近くてよい山なり」（『登高行』７号）の報告となり、谷川岳隆盛の発端となる。1930（昭和５）年小島隼太郎（烏水の息子）ら（青山学院大学）による一ノ倉沢の初登攀が成し遂げられ、東北大学の小川登喜男やそれに続く渡辺兵力、高木等による東面の岩場の華々しい初登攀の数々は魅力を証明し、上越線開通はその隆盛を決定的なものとした。

谷川岳を近くした上越線は登歩渓流会をはじめとする東京周辺の社会人山岳会クライマーを惹きつけた。後の第２次RCCに代表される多くのクライマーを育てたのも一ノ倉沢に代表される谷川岳の岩壁群であり、剱岳、穂高岳と並ぶ日本の３大岩壁の１つと称される事になる。しかし、登山の隆盛は多くの遭難をも惹起し「魔の山」を冠せられてしまう。

これら多くの登山、特に登攀史上に関る貴重な資料を散逸させないように蒐集・展示し、後世に伝えるべくみなかみ町に働きかけて開館したもの。温泉の町、観光の町「みなかみ」は山岳観光の町でもある。水上温泉街には「みなかみ町山岳資料館」（07年３月末開館）があるが、こちらは谷川岳全般と利根川源流地域、尾瀬・藤原地区の資料と地元ゆかりの登山家の資料を展示し棲み分けている。群馬が生んだヒマラヤニスト・山田昇の業績を残す「山田昇ヒマラヤ資料館」(94年４月開館）は沼田市の生家のりんご園の一角にあるが、これら小規模３館を「群馬の山岳資料館トライアングル」として連携、運営していきたい。

図書受入報告（2009年12月）

著　者	書　名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
角田公雄	越えてきた山――私の101名山	326p／20cm	白山書房	2009	著者寄贈
向一陽	ヒマラヤ世界――5000年の文明と壊れゆく自然（中公新書 No.2026）	290p／18cm	中央公論新社	2009	出版社寄贈
一等三角点研究会（編）	アルピニストとハイカーがまとめた一等三角点総覧	151p／21cm	日本測量協会	2009	発行者寄贈
土居次義	水彩画家　木下藤次郎	275p／22cm	美術出版社	1981	宮下啓三氏寄贈
和田嘉夫（編）	昔の富士登山	100p／26cm	和田嘉夫（私家版）	2009	著者寄贈
落合正治（編）	神奈川大学チョモランマ遠征登山隊2009報告書	249p／30cm	神奈川大学ヒプンサミッツ実行委員会	2009	発行者寄贈
尾野益大（編）	剣の縁――NPO法人剣山クラブ創立５周年記念誌	127p／30cm	剣山クラブ	2009	発行者寄贈
田淵武樹	徳島 野生のラン	115p／19cm	剣山クラブ	2009	発行者寄贈
裾野市立富士山資料館（編）	富士山須山口登山道調査報告書――裾野市立富士山資料館資料集	101p／30cm	裾野市立富士山資料館	2009	発行者寄贈
水越武	熱帯の氷河――水越武写真集	192p／26×24cm	山と渓谷社	2009	出版社寄贈
国立公園管理公団（編）	韓国の国立公園――国立公園案内書	166p／30cm	国立公園管理公団	2005	李仁禎氏寄贈
Kenzo, Okawa (ed.)	The Goddess on the Mountains in Southwestern China	124p／29cm	Sichuan Publishing G	2006	中村保氏寄贈
Chinese Mountaineering Association (ed.)	Olympic Flame Shines atop Mt. Qomolangma	239p／29cm	People's Sports Publishing House	2008	中村保氏寄贈

❖編集後記❖

●新年を迎えて、早いものでもう３週間ほど過ぎてしまいましたが、どのような年を迎えられたでしょうか。今年も、皆さんに楽しみに待たれるような会報作りを心がけたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

●ここ10数年ほど停滞気味だったアルパインクライミングの世界で、最近、若い登山家たちの活躍が目につくようになってきました。その分析を日本ヒマラヤ協会の山森さんにお願いし、巻頭記事にしました。

●尾上会長による年頭のあいさつは、日本の登山界全体の問題点を提起しているような気がします。厳しい時代だからこそ、登山の価値が再認識されてしかるべきではないでしょうか。

（神長幹雄）

日本山岳会会報　山　776号

2010年（平成22年）１月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　尾上 昇
編集人　神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社